

2019年度 第7回観察会 記録

日 時	2019年10月5日(土)～8日(火)	
観察地	鹿児島県沖永良部島	
講 師	地球村研究室代表・石田秀輝先生(東北大学名誉教授)	
テー マ	沖永良部島地球村	
備 考	参加者29名 (田中先生、スタッフ3名含む)	記録；坪井都子

《はじめに》

石田秀輝先生は、「今を生きる我々が考えなければいけないことが2つある。一つは急激に劣化する地球環境問題、もう一つは物質的消費欲求の劣化である。この2つの限界が社会の閉そく感を生み出し、少子高齢化や人口減少に大きな影響を与えている。大きな山場を迎えると考えられる2030年をターゲットに、2つの課題に答えを出さなければならない。一つの地球の中で暮らすという制約のなかで、こころ豊かな暮らしの形を考える「バックキャスト(注)」という視点で、個人を共同体や自然に紡ぎ直すことで持続可能な社会の構築ができると考える。」と説く。この提唱を実証するため、生活拠点を東京から沖永良部島に移し、地球村研究室立ち上げ多くの事業に取り組む毎日とのこと。村人と共に取り組む地球村の活動を現地で見せていただいた。

(注) バックキャスト思考：未来を予測するうえで、目標となるような状態・状況を想定し、そこから現在に立ち戻りやるべきことを考える思考法。

1日目(10月5日) 晴れ

参加者29名は2グループに分かれ、鹿児島経由と那覇経由で約4時間飛行後沖永良部島空港で合流。おきのえらぶ観光協会事務長・古村英次郎さんの案内で、「フーチャ」を見学した。

1. フーチャ

「フーチャ」とは沖永良部島特有の隆起サンゴ礁が浸食されてできた「潮吹き洞窟」のこと。季節風や台風時には20～70mの潮を吹き上げ、天高く飛び散った水滴が霧状になって島の農作物に大きな被害をもたらしてきた。1963年、4ヶ所のフーチャの内3ヶ所を破碎し、被害の少ないこのフーチャだけ観光資源として残した。海岸は隆起サンゴ礁に覆われ、黒くぼこぼこと尖っている。石灰岩の隙間にはグンパイヒルガオが咲き乱れ、透き通った海の美しさと相まって南の離島に来たことを実感した。



潮吹き洞窟のある「フーチャ」

2. 沖永良部島の歴史と自然 (おきのえらぶ観光協会・エラブココにて)

冒頭、地球村研究室代表・石田秀輝先生が地球村研究室の取り組みの一端を紹介して下さった。曰く、「島の人々は家族的でとても話し好きなので遠慮なく話しかけてほしい。」

島の自然の豊かさは明らかに減ってきている。郷土の伝統を基盤に、島民に次の2つのことを探している。

- ① 自給しよう
- ② 島の人が自慢できるようにしよう」と。



石田秀輝先生(グリーンのシャツ)

(1) 沖永良部島の生物多様性と保全、奄美諸島のデンデンムシ 講師：宗 武彦氏

エラブココの外の畑の中に見える2本の柱状の「池水堰」の説明があった。これは石灰岩に溜まった水を堰き止め貯める畑の大切な水源であり、川のない島で水を確保する工夫のこと。

昆虫大好きという宗氏から、エラブマイマイ（陸産貝類で、通称デンデンムシの1種）の紹介あり。エラブマイマイは絶滅危惧II類に指定され、かろうじて2010年島内3ヶ所で生息が確認されたとのこと。キカイキセルモドキ、ムカデ等の棲息状況の説明や、持参のチョウや貝の標本を多く見せていただいた。近年島の昆が少なくなってきており、今後注意深く見守って行きたいとのことであった。

(2) 沖永良部島の歴史と野生植物 講師：新納 忠人氏

島には6000年前の縄文時代から人が住んでいた。人々は距離の関係からか、鹿児島より沖縄に親近感を持っている。1609年から一時琉球王国の支配下にあったが、江戸期は薩摩藩の支配下に、そして明治以降、鹿児島県となる。第2次大戦後の1946年アメリカに占領下に、7年後の1953年悲願の日本復帰を果たした。

沖永良部はかつて稻作が盛んであったが、減反政策によりすべてサトウキビ畑などに代わった。豊かな海に囲まれ、新鮮な魚が豊富な中で食生活に魚食文化が無い。魚は贅沢な食材で漁業は低調とのことである。

① 島の地形

島の最高峰である大山（246m）は石灰岩層、基盤岩（凝灰岩）層石灰岩でできている。

島の最も広い面積を占めているのは琉球層群の古生代下部層である。本層は海面下-20mから大山の標高200m部分まで層厚は最大200m以上に達する堆積層である。

② 島の野生植物

300種を6つの生育場所ごとにスライド映像で紹介された。

- ① 砂浜；グンバイヒルガオ（右写真）、ツルナ、ハマニガナ、ハマオモト等
- ② 岩場海岸；イソノギク、オキナワチドリ、ボウコツルマメ（絶滅危惧種）等
- ③ 畑地；シロノセンダングサ、シマツユクサ（下の花弁が大きい）等
- ④ 低地の植物；リュウキュウコクダン、キャッサバ、ソテツ（飢饉のとき、食糧にした）等
- ⑤ 石灰岩山地；アカギ、アコウ、シークワーサー、シャリンバイ（大島紬の染色用）等
- ⑥ 非石灰岩山地；ヒカゴヘゴ、カンヒザクラ、クチナシ、リュウキュウマツ等

**2日目（10月6日） 晴れ****1. 西郷南洲記念館**

“南洲”は西郷隆盛の号。西郷（1828-1877）は大久保利通、木戸孝允とともに明治維新の三傑とされる。薩長同盟の成立や王政復古に成功し、戊辰戦争を主導した江戸無血開城の立役者である。1877年私学校生徒の暴動から起こった西南戦争の指導者となるが、敗れて城山で自刃した。死後十数年を経て名誉を回復され、後嗣の寅太郎は侯爵となる。



記念館に着いてまず目に入るのは、海岸沿いの吹きさらしの囲い牢に囚われた西郷南洲の等身大の姿。痩せこけた姿であるが、凛として端坐している。

1年半以上の浜辺の格子牢を経て、西郷を尊敬する間切横目(牢番)・土持正輝の献身的な努力で座敷牢に移り住むことになり、待遇も改善された。この時、西郷は沖永良部の人々に勉学を教え、「敬天愛人」の思想は今も沖永良部の人々の生活に浸透していることを実感した。

西郷の四行漢詩「感懷」(心に感じたこと)が紹介された。

幾歎辛酸志始 丈夫玉碎愧飯全 一家遺事人知否 不為児孫買美田

【口語訳】何度も辛く苦しい経験を経て、はじめて人間の志操は堅固になっていく。いっぱいの好漢はたとえ玉碎しても、なすことなく無駄に生きることを恥とするものだ。わが家の遺訓を人様はご存じだろうか。それは子孫のために必要以上に肥沃な田畠を買わないことだ。

2. 大山遊歩道散策

新納(にいろう)先生の案内で、島の最高峰「大山」の遊歩道を1時間余散策した。ここには「大山植物園」や「大山野営場」、「大山総合グラウンド」等が配置されている。そして大きな“みんなの手で大山を大切に育てましょう”の標識が目に入る。山頂に近い場所で基盤岩(輝緑岩、輝緑凝灰岩)と石灰岩の境界を観察した。この島の成り立ちの象徴的な場所である。昨日、新納先生にスライドで紹介のあった植物を観察しながら、遊歩道を歩む。

クロトン・ホウライチク・シークワーサー・オオシンジュカヤ・クワズイモ・イヌビワ・センリョウ・ムサシアブミ・ホルトノキ・ユズリハ・ゴンズイ・ノシラン・ビロウ 等々



盤岩と石灰岩の境界が見れる。



静かな大山遊歩道を歩く。



ムサシアブミの実

昼食は、和泊町の研修センターで、島の食材を用い、島の料理人と修行中の息子さんが作ったお弁当を頂いた。見た目もすっきりと美しく、とても美味しかった。

3. 歴史民俗資料館

入場すると南の島のプレゼントとして宝貝をいただいた。子安貝ともいう。説明書によると南の海にはニライ・カナイという神様の国があり、この国から贈られた宝物で、財宝や安産の象徴という。展示では島の一大産業になった「エラブユリ」や沖永良部島の伝統工芸である「芭蕉布」に惹きつけられた。

(1) エラブユリ

ユリは聖母マリアのシンボルとされ、キリスト教の象徴的な花と捉えられてきた。100年以上昔のこと、島を訪れた貿易商アイザック・バンディングが、沖永良部に自生する百合に注目し、ユリの栽培をすすめ、球根を高値で買い付けた。塩害に強く、島の赤土でよく育つユリの球根は、瞬く間に島

中で生産が拡がった。二度に亘る界大戦や目まぐるしく変わる世界経済、蔓延するウイルス病など幾多の苦難に見舞われながらも、島の人々はたゆまぬ努力でこの花を守り続けてきたとのこと。

(2) 芭蕉布：バナナの木に似ている糸芭蕉の幹から採った纖維で糸を紡ぎ、布を織りあげる。南西諸島に古くから伝わるこの伝統的な織物を島の人たちは大切に残してきた。糸の色はそのままでも美しいキナリ、もしくは島の素材で草木染めにする。それらを組み合わせて柄を織り込んでいく。纖維の硬さで分別して、それぞれシーツや衣類、鞄、小物用に使い分けているとのこと。

館の外には約130年前の明治初期の家屋や、ネズミ返しのついた細い階段の高床式倉庫が復元展示され、湿気の多い島ならではの工夫が随所にされていた。

4. 島内めぐり

(1) 越山(こしやま)展望台

島中央部にあり、標高180mにある公園の展望台。右側に太平洋、左側に東シナ海を一望できる。1月下旬から2月上旬にかけては緋寒桜が見頃を迎え、多くの人が桜見物を楽しむ名所とのこと。

(2) 世之主の墓

15世紀の島主「世の主加那志(よのぬしがなし)」の琉球式の墓。岩壁を掘り込んだトゥル墓で貴重な文化遺産である。時の四天王と呼ばれる豪族の骨も分骨されているという。

(3) 半崎

島の中央の北側にある断崖絶壁の景勝地。ウミガメの泳ぐ姿を見ることができた。どこまでも広がる青い澄んだ海で、眺望抜群。美しさ景観を満喫した。

(4) ワンジョビーチ

数人の子どもや若者が泳いでいた。この海岸は4月に海開きが行われ、海水浴やキャンプの利用の多い人気ビーチとのこと。室内だけでなく屋外にもトイレやシャワーがあるなど設備もよい。海岸のきめ細やかな砂が心地よく、破片状のサンゴがいくらでも拾え、可愛いタカラガイも数個見つけた。



断崖絶壁の景勝地「半崎」



美しい砂浜「ワンジョビーチ」

(5) 日本一のガジュマル（右写真）

島の一番北東の国頭(くにさき)小学校の校庭には日本一大きいガジュマルの木がある。第1期卒業生が記念植樹したもので、樹齢118歳、横幅22mに達する。太い枝のいたる所から気根が伸びて地上に着き、第2の根っ子として、本体を頑丈に支え、地からの養分を吸収している。「新日本名木百選」の一つという。



校庭に潮汲みの像と潮播きの像があった。沖永良部島の経済の主たる塩作りを子どもたちに伝えていきたい島人の想いを感じた。

(6) 夕食会

観察会でお世話になる石田秀輝先生、新納忠人さん、吉村英一郎さんを招待し懇親会を行なった。焼酎の飲み較べや、郷土料理を、また多岐にわたり話に花が咲き、楽しく有意義なひと時であった。

3日目（10月7日） 晴れ

1. ファングル塾の見学と事例紹介

知名町にはジッキョファングル塾と名付けた活動組織がある。その内容の紹介があった。

(1) 「ジッキョ」とは「瀬利覚」と書き、市町村内を小区分した地名表示“字=あざ”的一つで、昔からの呼称である。

「ファングル」とは人々の気質（堅い・頑固・意地張り）を指す。すなわちジッキョの人々の意志でもって作られた組織あるいは活動を「ファングル塾」というとのこと。

ファングル塾は五項目にわたる次の活動を行い、これを「5本の矢」という。

- I. たまり場：毎週火曜日は男たちのたまり場、夏休み子ども道場もある。
- II. やさい市：毎週水曜日朝市・ばあばの井戸端会議
- III. ジッキョ丸ごと散策ツアー：字(あざ)の観光ガイド
- IV. 日本ユネスコ協会連盟未来遺産登録・トーギョの里プロジェクト：絶滅危惧種トーギョの保護
- V. 元気・環境部：字の誰もが手をつけないボランティア

(2) 「ジッキョヌホー(瀬利覚の川)」

生活の全てを担った湧水は集落の貴重な財産であり、シンボルでもある。今も字民全員で守っている。平成の「名水百選」に認定されている。ここで、字民の方たちからおもてなしをいただいた。サーターアンダーガー（砂糖をつかう揚げ菓子）の等の手作りおやつをご馳走になり、三線（さんしん）の演奏を鑑賞、三線に合わせて皆で輪になり踊りを楽しんだ。



ジョキョヌホーの碑



ジョッキョヌホー

2. 知名町生活研究グループによる料理教室とランチ

知名町生活研究グループの方々が料理教室を開いてくれた。私達はにわか生徒、男性も女性も沖永良部料理作りに挑戦した。

できた、できた！ 生活研究グループの方も私たちも一緒になってわいわいお喋りしながら作りたて郷土料理を美味しく頂いた。興が乗ると



ここでも三線と踊りの輪ができた。

3. オプショナルツアー

(1) ケイビング体験

ケイビングの参加者は29人中15人。ほとんどの人がケイビングは初体験のようだったが、3名のガイドのサポートにより、リムストーンケイブと呼ばれる鍾乳洞の探検を約2時間行った。沖永良部ケイビング連盟の事務所で、ライト付のヘルメット、ウエットスーツとさらにその上につなぎの服手袋に厚底シューズで身支度。その姿に「探検というより、工事現場の作業員みたい」と笑いあった。



リムストーンケイブの内部

車で鍾乳洞近くまで移動、やぶ道に分け入ると、間もなく大きく口を開けた鍾乳洞の入口に着いた。滑りやすい急傾斜を下りると、薄暗い地底に川が流れていた。隆起サンゴ礁でできた沖永良部島には、こうした地下水が流れる洞窟、暗川（くらごう）が数多く存在するという。

貴重な鍾乳洞を汚さぬよう、手袋についた泥を川で洗い流し、いよいよ探検が始まった。洞窟はほぼ平坦だが、場所により胸まで水に浸かったり、腹ばいの姿勢で通り抜けるなど、スリリングな場所もある。ヘルメットを天井にぶつけて鍾乳石を傷つけないよう、「頭あ！」「頭あ！」と声を掛け合いながら進んだ。途中、全員がヘッドライトを消し、光が全く届かない真の闇を体感した。試しに、まぶたを開け閉めしてみるが全く何の変化もない。貴重な体験である。手と足と、にぎやかな口と、全身をフル稼働して、さらに奥へと進んだ。狭い所を通り、広い空間に出る繰り返し、そのたびに感嘆の声が沸いた。ガイドの苦労は言うまでもない。

いよいよクライマックス地点に到着。棚田の畦のように鍾乳石ができ、そこに水が溜まっていることからリムストーンケイブと名付けられている。棚田というより、宮殿の名こそふさわしい異次元の世界が広がっていた。この感動の景観（写真・右上）は、我々が温かいお茶とおやつをいただいた一休みしている間に、ガイド2人が先行し、強力な懐中電灯を何本もあちこちにセットして、見せてくれたものだ。宮殿に立つ大きな石柱はどれほどの時間がつくり出したのだろうか、想像すらできない。

ひと時、宮殿でくつろいだ後、なごりを惜しみながら引き返すと照明かと思う光が頭上に現れ、その光を目指し、ロープを伝い急坂を登ると、明るく緑にあふれる地上へと出た。

今回のケイビングは、オプションとして実施したものだが、予想を超える参加人数になった。



ケイビング体験中

感想文にもあるように、参加者は圧倒的な自然を肌で感じ大いに感動したようであった。その体験はかけがえのない地球環境への思いを一層強くさせたに違いない。

(2) 昇竜洞と南西海岸景勝地めぐり

① 昇竜洞（右写真）

東洋一の鍾乳洞で、鹿児島県天然記念物に指定されている。昇竜洞は全長3500mのうち600mが一般に公開され、見学することができた。洞内は大変広い。鍾乳石の発達が素晴らしく、特にフローストーンは全国最大級という。（右写真）



② 酔庵（右写真・石田先生宅）

「酔庵」は、石田秀輝先生のご自宅であり、「酔庵塾」を主宰されている。昇竜洞出口から下方向へ200mの場所にあり、ジャングル状態の土地1000坪を購入し、沖永良部島での活動の拠点にされている。広い庭ではバナナが育ち、芝生の木の傍で猫が遊んでいた。家の中を案内していただいたが、太陽の光が存分に差し込んであふれる感じで、また吸水性のあるフローリングの床は裸足で歩くと心地よさを覚えた。



③ 田皆岬（たみなみさき）



奄美十景の一つ。沖永良部島の北西部にあり、東シナ海に突き出した岬は51mの断崖絶壁、近くの岩を持たないと下を覗き込めない。島内屈指の景勝地であり、海を見下ろすとウミガメを見ることがあるというが、恐ろしさが先に立ち覗き込めなかった。

4日目（10月8日） 晴れ

1. 魚のセリ見学

最終日の一斉行動は、9時からの漁港での魚のセリの見学。大きなイセエビ、美しい赤色の魚等々が並ぶ。石田先生ご夫妻も新鮮な魚を求めていた。馴染みの仲買人に買ってもらうとのこと。魚食文化のない沖永良部島では、魚は贅沢な高級品だという。石田先生たちは、島の魚食の普及もテーマに挙げられていることだろう。



2. 最終日のオプション

Aグループ

レンタカーで島内めぐりや地元の人との交流、美ら玉作り、観光協会のキャラバンでの観光等々自由に楽しい時間を過ごした。

写真左：昇竜洞出口で、地元の人と交流



写真右：ここから眺める夜明けは、言葉を失うほど

美しいと言われる「ウジジ浜」



Bグループ

那覇空港駅から那覇の町へ。展望レストランでの昼食後、「沖縄県立博物館・美術館」「那覇国際通り」の通り抜け等、フリータイムを愉しんだ。



那覇国際通りの巨大シーサーの前で

おわりに

沖永良部島は自然豊かな島でした。島の人々は素朴で親切、そして島の伝統は今も生活の中にしっかりと根を下ろしていました。

しかし、高度成長経済の煽りがこの島にも及び、自然の環境が少しずつ壊され、自然の豊かさが減っていることも否めないことが分かりました。

西郷隆盛の教育思想「啓天愛人」は島の人々の思想と生活に浸透し、地球村研究室の思想と実践に結びついていることを実感しました。地球環境問題に取り組む石田秀輝先生は「バックキャスト思考」を提唱され、その実践の地として沖永良部島に“地球村研究室”や「酔庵塾」を起ち上げ、島の人々と環境・経済・文明が共存できる社会の実現に取り組まれています。

“地球村研究室”は減反政策の中で消滅した米作りの再開や無農薬ジャガイモ作りに取り組んでいるとのことでした。また、学びの場として2018年「星槎大学サテライトカレッジin沖永良部島」、小中学生対象の「放課後の学びの場」、I・Uターン者を対象にした「はじめての島むに教室」も開始されたとのこと。

島の経済の自立をめざし、「e-taba 沖永良部未来基金」の設立準備を開始し、星槎大学と連携し、産官学による沖永良部島での人材育成や新産業創出既存産業の活性化に向けた取り組みも始まっています。

この取り組みがSDGsとどう関わるかを毎年、国連大学で発表していること、世界も注目する活動がこの小さな島で行われていることに感動を覚えたことでした。

島人に提案されている目標の「自給しよう！」「自慢できるようにしよう！」が、一歩一歩確実に進んできましたが。島の豊かな自然を維持しながら島人が経済的に、文化的に豊かな生活を具現化すべく頑張る石田先生はじめ、すべての村人たちの願いがよく理解でき、同時に私たちに出来ることを真剣に考えてみたい。そのような意識に改めて目覚めた観察会でした。

学ばせて頂いた私からの提案です。酔庵塾の人々はすでにお考えだと思いますが、「豊富な海の幸を日常の食生活に取り入れること」です。おいしい魚が豊富なだけに、魚を食べる習慣がないことに驚くとともに、もったいない思いがしました。

公私ご多忙にも関わらず、案内をしていただいた石田先生、新納先生、宗先生、企画・準備から案内・車両運転まで4日間張り付いてお世話くださった観光協会の古村さんに心から感謝いたします。誠にありがとうございました。

以上

沖永良部島観察会に参加いただいた皆様へ 20101012

皆さん、沖永良部島観察会から戻られ、その余韻に浸りながら、猛烈な台風が甚大な被害をもたらさないことを願いながら週末をお過ごしのことだと思います。

今回の観察会を全面的にお世話くださった石田秀輝先生とのつながりは、京都に有る国際日本文化研究センターの安田喜憲先生（現ふじのくに地球環境史ミュージアム館長）が主催する「環境・経済・文明」研究会であり、2003年に「森里海連環学」を提唱した前後に遡ります。その研究会では、当時は互いに対立関係にあった環境と経済と文明（社会）が協働する時代を生み出さないことには未来はないとの基本的考え方を軸に、多様な分野の皆さんのが集い、議論を重ねました。その先に浮き彫りになったのが、お金や物に代わる「いのち」を根底に置いた「生命文明」であり、石田先生のお考えの軸に定められています。昨年4月に閣議決定された「第5次環境基本計画」には物質文明社会に代わるべき新たな「環境・生命文明」社会が明記されるに至っています。本講座の「森里海のつながり一命の循環」（森里海連環学）は、地球の基本生態系としての森林域と海域の不可分のつながり、それを良くも悪くもする人の営みとしての「里」のありようを問い、本来の姿に戻す学問と言え、全ての命の源で有る水の循環を大事にする生命文明と重なるものなのです。

今回の観察会は、このまま目先の経済成長を求め続けば、地球生命系が崩壊することを誰しもが感じながら、グローバル金融資本主義経済の呪縛から逃れることのできない今日、「原点」を見つめなおす必要性、それは地方（田舎）にこそ存在するに違いないとの考えに基づいています。今回は、地方の典型、離島にこそそのような大事なものが維持されているに違いないとの思いのもとに、“地球村”を感じることを目的に企画されました。

周囲をサンゴ礁に囲まれたサンゴからできた石灰岩の島、島の周りに広がる紺碧の海、年間3,000mmにも及ぶ雨が降るにもかかわらず目立った川がなく、いかに地下に水を溜め込むかが工夫されてきた島、最高標高は240m、平地に恵まれた平らな島、自然林が少なく農地が広がる島、国の減反政策の中で水田は全てなくなり、サトウキビとジャガイモとツッポウユリなどの花卉栽培の農業現場を見ながら、それらの背景の島の歴史や文化についての説明を聞き、「地球村」の意味に思いを巡らす4日間でした。

その中でもずっと頭の中を巡ったのは、島の周りには今も健全な海があるのに、魚食の習慣や文化がないことの不思議でした。日本の伝統的な稻作漁労文明とは異なる文明が存在することの驚きと新鮮さでした。同時に、石田先生たちが取り組み始めた水稻栽培の試みが、手付かず状態に近いの周辺の海の恵みをもっと生かすことにつながり、沖永良部島ならではの“自足”的な未来を開く潜在性を、海が担うのではとの思いを深めました。

四日間にわたる観察会への同行、島の自然・歴史・文化・観光を分かりやすく解説をいただいた古村英次郎さんならびに新納忠人さんに深く感謝いたします。本年度のハイライト的な観察会に実現に奔走された花住繁さん、北川恵子さん、坪井都子さん、“懐かしい未来”を体感する観察会のお世話、大変ご苦労様でした。お礼申し上げます。

2019年10月12日 田中 克

